

16章

29. オムリの子アハブは、ユダの王アサの第三十八年に、イスラエルの王となった。
オムリの子アハブはサマリヤで二十二年間、イスラエルの王であった。
30. オムリの子アハブは、彼以前のだれよりも主の目の前に悪を行なった。
31. 彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであった。
それどころか彼は、シドン人の王エテバルの娘イゼベルを妻にめとり、行ってバルに仕え、それを拝んだ。
32. さらに彼は、サマリヤに建てたバルの宮に、バルのために祭壇を築いた。
33. アハブはアシェラ像も造った。
こうしてアハブは、彼以前のイスラエルのすべての王たちにまして、
ますますイスラエルの神、主の怒りを引き起こすようなことを行なった。
34. 彼の時代に、ベテル人ヒエルがエリコを再建した。
彼は、その礎を据えるとき、長子アビラムを失い、門を建てるとき、末の子セグブを失った。
ヌンの子ヨシュアを通して語られた主のことばのとおりであった。

17章

1. ギルアデのティシュベの出のティシュベ人エリヤはアハブに言った。
「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。
私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」
2. それから、彼に次のような主のことばがあった。
3. 「ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。
4. そして、その川の水を飲まなければならない。
わたしは鳥に、そこであなたを養うように命じた。」
5. それで、彼は行って、主のことばのとおりにした。
すなわち、彼はヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに行って住んだ。
6. 幾羽かの鳥が、朝になると彼のところにパンと肉とを運んで来、また、夕方になるとパンと肉とを運んで来た。
彼はその川から水を飲んだ。
7. しかし、しばらくすると、その川がかれた。
その地方に雨が降らなかったからである。

説教

預言者エリヤと言えば旧約聖書最大の人物として後々までも語り伝えられるほどでした。

バプテスマのヨハネはエリヤの再来と言われました。

イエスさまの山上の変貌の際にモーセと共に弟子たちの前に顕れました。

火の戦車により生きのまま天に挙げられて行ったこのエリヤこそはまさしく旧約聖書最大の預言者と言っていいでしょう。

ところで、イスラエル王国に於いて預言者はどのような役割を果たしたのでしょうか。

預言者とは、その訳語の通り「神のことばを預かってそれを語る」つとめです。

預言者は「神のことばを預かってそれを語る」つとめを神さまからいただいていた。

元来、人々に神のことばを教えるつとめを受けていたのは祭司でした。

祭司は

「聖なるものと俗なるもの、また、汚れたものときよいものを区別」して、 (レビ記 10:10,11)

「主がモーセを通してイスラエル人に告げられたすべてのおきて」をイスラエルの民に教えるよう命じられています。

彼らの教える教えは、

祭儀のみならず日常生活倫理にまで及び主の教えに基づいて裁判するよう命じられています (申命記 17:9-13)。

この他にも、勿論、王は常に神のことばを読み、みことばに従って政治を行わなければなりません。

王は、

武力に頼ることなく (申 17:16)、

金の力に頼ることなく (申 17:17)、

神のことばに従って政治を行わなければなりません。

こうある通りです。

「彼がその王国の王座に着くようになったなら、

レビ人の祭司たちの前のものから、

自分のために、このみおしえを書き写して、

自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。

それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。

それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることがないため、

また命令から、右にも左にもそれることがなく、

彼とその子孫とがイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるためである。」 (申 17:18-20)

すなわち、イスラエル公式の手順としては、

まず律法を守り行なう祭司がこれを実践して人々に教え、

その教えを国王が自分の手で書き記して手元に置き、一生これを読み続けて実践します。

そうやってイスラエルの国中に主の教えを実現していくのでした。

しかし、イスラエルの歴史に於いては、この機能が麻痺する時がしばしばありました。

すなわち、祭司と国王が墮落して神のことばを実践しようとしないうちです。
そうすると、人々はいよいよ偶像崇拜と悪行に耽っていくため国全体が墮落して神の怒りを受けて滅びてしまいます。
ですから、そのような時に、
これ以上墮落して国が滅びることがないように、
神さまは預言者を立ててご自身のみことばを人々にお語りになるのです。
預言者自身、イスラエルの国家制度の枠の中にはない言わば非公式の存在でしたが、
イスラエルの国家体制が麻痺してどうしても必要な時に神さまはしばしば預言者を世に遣わされたのです。

さて、エリヤが預言者として登場した時はイスラエルの最暗黒の時代でした。

クーデターに次ぐクーデターで実権を掌握したオムリは、
大きな繁栄の時代を築くも、偶像崇拜に耽り、
息子アハブにシドン人の王の娘イゼベルを迎えるなど、
「主の目の前に悪を行い、彼以前の誰よりも悪いことをし」ます。

そして、さらにその息子アハブは、
自らがシドン人の妻イゼベルの持ち込んだバアルを崇拜するにとどまらず、
イゼベルの強力なバアル宣教の意欲に影響されて、「バアルのために祭壇を築」き、
主の預言者を残らず処刑して、バアル崇拜を国中に徹底的に強制して浸透させようと努めたのです。
バアルは「肥沃の神」「農作物の豊穡をもたらす神」としてカナンで根強く信仰されていました。
日本で根強く信仰されてきて今も根強く生き続けている、五穀豊穡をもたらす天照大神信仰に似ています。
それは御利益信仰と言い換えてもいいかも知れません。
このような御利益信仰の最大の問題点は、
要するに「多産」で御利益をもたらせばいいのであって、そのためには何でもやるという点です。
自分たちの物質的繁栄のためには、
偶像崇拜は勿論のこと、略奪でも人殺しでも嘘つきでも姦淫でもとにかく何でもやるのです。
要するに自分さえよければそれでいいからです。
だから、偶像崇拜の強制を強化するということは、
いよいよ自分が自分の欲を実現していくための体制作りをしていくことを意味します。
神々の名を笠に着て、
罪深い人間のエゴと欲を肯定し、
正当化し、
さらには神聖化して、
徹底的に自分中心に悪を働いていく、それが戦前の天照大神崇拜であり、旧約時代のバアル崇拜でありました。
つまり、
アハブ王がイゼベルに唆されてイスラエルの国中にバアル崇拜を徹底させようとしていたということの意味は、
彼らが、父オムリのおかげで既に繁栄していた王国のさらなる大きな繁栄をはかろうとしていたということです。
さらに大きな御利益、さらに大きな収穫、さらに大きな権力、さらに大きな繁栄を狙っていたということなのです。
しかし、このような権力者の膨れ上がる傲慢を叩き潰すべく、神から遣わされて預言者エリヤが立ち上がります。

そして、アハブ王に対してこう宣教したのです。

1. ギルアデのティシュベの人のティシュベ人エリヤはアハブに言った。

「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。

私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」

これは「肥沃をもたらす御利益神」に対する真っ向からの挑戦でした。

「五穀豊穡をもたらすバル神」の面目を丸潰しにして、干魃と飢饉をもたらすと言うのです。

そして、それが「イスラエルの神、主が生きておられる」ことの証明となると言うのでした。

この直後、

エリヤは神さまの命令によりケリテ川のほとりとシドンの地に三年の間潜伏しながら預言の成就を待つこととなります。

そうしてカルメル山頂での決闘で偶像に仕える預言者たちを皆殺しにして宗教改革を成し遂げることとなります。

すると、また今度はイゼベルの怒りを買って殺されそうになり、ホレブに逃げます。

そうしながら、弟子としてエリシャを教育したり、続けてアハブ王に警告を発したりしながら、預言活動を続けるのです。

明後日は8月15日で日本の敗戦記念日です。

この十年の間、日本の国が特に急激に右傾化しているように思える今日、

私たちキリスト教会がこの世に於いて果たしていかなばならない責任と使命は何でしょうか。

かつてのような侵略戦争と、それを強力に推進していくための偶像崇拜の強制を推進する動きに警告を発していくことです。

- ・「日の丸、君が代」の強制
- ・靖国神社の首相参拝
 - = 首相が国民を代表して戦死者の霊を拝むという既成事実を通して、事実上の国家神道の復活を狙うもの
- ・靖国神社の「非宗教化」による国営化
 - = これは露骨に戦時中の国家神道の復活を狙うもの
 - ~ 戦前も、「神社は宗教に非ず」と神社参拝を「非宗教化」して全国民に参拝を強制した

特に、今最も差し迫っていて恐らくこれからの最大の問題となるであろうことは、これから日本が戦争をするということです。

1999年の「国旗・国歌法」、「周辺事態法」、「住民基本台帳法」から始めて、

自衛隊法改正、個人情報保護法、自衛隊のイラク派兵、

そして今は憲法改正、その中心は九条改正、さらには靖国神社の国営化、

こうした動きは、要するに日本がこれから戦争をする準備をしているものです。

戦争をしやすい国の体制作りが今着々と進められているのです。

アメリカの植民地としてアメリカの下請けの戦争を請け負わされて、

世界中の至る所で「平和維持のため」と称して戦争をさせられるようになります。

今や日本の企業は世界の至る所に存在しています。

その利権を確保するために、

例えば、今回イラクで石油の利権を確保するためにやっているように、

日本の財界は、現地の国の警備によらない、

(アメリカが日本に行っているような)日本独自の軍隊の駐留による保護を要求しています。

このような世の動きに対して、

私たちキリスト教会はどうしたらいいでしょうか。

このような世の流れに対して、

どのように警告を発していくべきか、

その模範を聖書のどこに見出していくべきであるか、

その一つのモデルとなるのが、私はエリヤではないかと思えます。

この当時、預言者といっても、社会的に見たら、何かそういう正式な職があるわけではありませんでした。

世の中の人から見たら、彼はただの乞食に過ぎません。

家もない、路上生活者どころか、野に野宿して生活しているのです。

川から汲んだ水を飲み、野の鳥に養われて、

よりによって、彼の敵地であるシドンの、

しかも今にも死にそうなやもめのもとに居候しながら、

情けなくも細々と食べさせてもらわなければならなかったのです。

そういう中で、エリヤは神のことばを宣べ伝える預言活動をしました。

貧しさと迫害に耐えて宣教活動をしました。

このことは、

彼の弟子エリシャが後に市民権を得、

のみならず王の絶大な信頼を得て、

「わが父」と王に呼ばれながら、言わば「王の宮廷預言者」のようにして預言活動をしたのとは対照的です。

何も無い中で、エリヤは宣教しました。

本当に何にもない、神のことばしか無い中で、彼はあらゆる困難を耐え忍んで、ただ神に信頼して宣教しました。

今の日本の状況の中で、キリスト教会はまさしくこのエリヤの立場にあると思います。

何も無い、

神のことばしかない、

市民権を得ているわけでもない、

権力者にツテがあるわけでもない、

金もない、

名声もないという、そういう状態です。

でも、何も無いけど、神のことばはあります。

神のことばを人々に語る使命と責任はあります。

何も無い中で、

しかし、神さまからこの世に遣わされている私たちは、

預言者エリヤのように、

「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。」

私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」

こう宣べ伝えて、神のさばきと悔い改めをこの世に宣べ伝えて行きたいと願います。

思えば、かつて戦時中、神社参拝の強制に抵抗した牧師たちも、実はこの世に於いては何も無い者たちでした。

韓国で医者をしていた朴寛俊長老は、

日本による神社参拝の強制をやめさせるべく、何度も総督に嘆願書と警告文を送っては警察に連行され、拘留されました。

しかし、それだけではダメだとわかるや、今度は 1939 年安利淑を伴って来日します。

そして、前朝鮮総督の宇垣一成や日匹^{のぶすけ}信亮少将、代議士の松山常次郎等に陳情し、彼らに

「日本は現在、あらゆる反逆を天地の創造主であられるエホバ神に向かって犯しています。

ですから神さまは日本を罰せずにはいられなくなりました。

硫黄の火で日本は焼かれて亡びます。」と説教して歩きました。

しかし、全く埒があかないと思った朴寛俊長老は、

決死の覚悟で「宗教団体法案」を審議する帝国議会に乗り込み、

傍聴人席から「エホバ神さまの大使命！」と叫びつつ警告文を議場へ向けて投げおろしました。

その警告文は次のような内容であった。

- 「 1 . エホバは唯一の真の神である。
- 2 . 彼は天地万物を創造、支配し、その摂理の下で人類の歴史は展開する。
- 3 . エホバの神を信奉する国はその祝福を受けて繁栄するが、彼に仕えることのない国は刑罰を受けるであろう。
- 4 . 韓国の信徒たちに日本の神社に参拝することを強要することは、神に反逆する罪だ。
- 5 . それ故、韓国の信者達に神社参拝を強要するな。
- 6 . 拘束されている韓国の信徒たちをすぐに釈放せよ。
- 7 . 万一、あなたが神の御意志に従わなければ、神は近いうちに日本を滅ぼされるであろう。
- 8 . エホバの神と天照大神とどちらがまことの神か、試して見よ。
薪を積んで火をつけ、神道信者と私を火の中に投げ入れろ。火で焼けない者が真の宗教を実証するのだ。
- 9 . 日本政府は悔い改めて暴政を朝鮮から撤廃せよ。」

結局、この事件で三人（朴長老、その息子、安利淑）は警察に逮捕されます。

その後、平壤刑務所に移送されて極寒の平壤で獄中生活を送り、その六年後に獄中で殉教します。

傍聴席から警告文を投げ降ろすというこの事件は今思うと如何にもバカみたいに見えますが、

しかし、当時としてはこれくらいしか抵抗の方法が無かったのも事実で、彼は自分のできる精一杯をしたのだと思います。

朴長老の意図としては、あくまで合法的にひとりひとりの政府要人に陳情し、

それでも埒が明かないため、結局は非合法的に帝国議会で叫ばねばならなかったのですが、

しかし、その際、法によって拘束されて審問されることになったとしても、

「その時にこそ、法に訴えて、朝鮮統治の実体をことごとくあばこう。

すると、大臣も、議員も、皆朝鮮統治の実状を聞き取ることができるではないか。」と考えていたのです。

韓国初代牧師のひとりで済州島への最初の宣教師でもある李基豊牧師は、

75歳で末期の胃ガンに冒され、水も飲めないような体調の中で、神社参拝に抵抗したため酷い拷問を受けました。

しかし、彼は、憲兵隊長、明石元二郎に向かってこう激しく怒鳴りつけたのです。

「どうして天照大神が神なのか。

主なる神が神さまだ。

天皇がなぜ現人神なのか。

天皇も腹が減ったら食べなくてはならない。

天皇も殴られたら痛いと感じるであろう。

イエスキリストの神を追い払う日本は、今に、その罪によって滅亡するであろう。」

このことは、殉教した朱基徹牧師然り、

「愛の原子爆弾」と言われる孫良源牧師然り、

かつて戦時中、神社参拝の強制に抵抗した牧師たちは、この世に於いては何も無い者たちです。

彼らは、自分たちの金に物言わせて抵抗したのではありません。

この世に於いて何か社会的な立場や権力を笠に着て国家権力に楯突いたのではありません。

この世から見たら、何もありませんでした。

エリヤのように、何もありませんでした。

でも、エリヤのように何も無かったけれども、しかし、エリヤのように神のことば一つで闘ったのです。

自分の牧会する教会と共に闘いました。

日本の最大の偶像である天照大神と天皇を敵に回して闘いました。

教団さえも敵に回して闘いました。

教団はその時彼らに何もしてくれませんでした。

教団は、彼らを迫害して、非国民呼ばわりして、除名しただけです。

彼らは他の誰に召されたのではない、ただ神に召されて闘いました。

神に召されて、神のことばを語りました。

神に召され、神に預言者として立てられ、神から遣わされて、神のことばを語りました。

時が良くても悪くても語りました。

自分の置かれた立場や状況の中で、精一杯、力の限り語りました。

いのちを賭けて、語ったのです。

みなさん、この罪の世に神のことばを宣べ伝えるのは、他でもない、この私自身です。

他に誰もあてにできません。

この私自身が、神に召されています。

この私自身が、預言者として神に召され、立てられ、世に遣わされています。

この私自身が、この罪に世に真実を語って神の栄光をあらわし、神の祝福をもたらすのです。

そして、この赤羽聖書教会もこれからの時代そうあるべきだと思います。

教団をあてにせず、（教団はあくまで戦って改革すべき対象に過ぎない）教会がしっかりと立っていかねばなりません。

今日、神さまから世に遣わされている私たちは、預言者エリヤのように、

「イスラエルの神、主が生きておられる。

私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は霧も雨も降らないであろう。」

こう神のさばきと悔い改めを宣教して、「イスラエルの神、主が生きておられる」ことを世に証ししていきたいと願います。

みなさんも一緒に戦ってくださるよう、主の御名により祈ります。